



株式会社 コーセー

東京都中央区日本橋3-6-2 〒103-8251

TEL.03-3273-1511 (代表)

<http://www.kose.co.jp>



2009
KOSÉ SUSTAINABILITY REPORT

社会・環境報告書



この印刷物で使用している用紙は、森を元気にするために間伐した木材の有効利用に役立っています。



環境への配慮も良い商品の条件

コーセーは昭和21年の創業以来、化粧品を創り、ご販売店を通してお客さまに届け、喜んで使っていただくという一連の流れを最も重視してきました。私も社長として、より魅力的な化粧品を創造すること、正しくお使いいただくためのカウンセリングといったことを大切にしています。より良い化粧品を目指して切磋琢磨するという、たゆみない新規開発や品質向上への思いこそ、コーセーの歴史そのものであり、これからも伝えるべきDNAだと考えています。

コーセーではより良い商品を創り出すため、全社を挙げて取り組んでいます。品質の追求だけでは「良い商品」を創ることが出来ない時代になってきています。お客さまの様々な価値観に合った商品をお届けすることや、製造時

や使用後の環境負荷の軽減に配慮し、世界中の人々に安心して使っていただけることが、「良い商品」の大切な条件だと考えています。

なかでも、地球環境との共存という意味で廃棄物の削減は重要であり、コーセーでは、生産現場からゴミとして出て行く廃棄物が無い「ゼロエミッション」を実現しています。このような取り組みもまた、「良い商品」の大切な条件のひとつです。大量生産、大量消費の時代は過去のものになりつつあります。製造を業務とする会社として、地球の資源を使うのは逃れられないことですから、資源を使うにしても、その資源を尊重し、再生・再利用によって無駄なく活かす意識が今まで以上に必要です。

循環型社会に向けた企業活動を

株式会社コーセー 代表取締役社長 小林一俊

貴重な資源を循環させるために

化粧品の生産現場では、化粧品の原料に加えて、プラスチックやガラスなど多種多様な資材を扱います。このため廃棄物の種類も様々です。これらの廃棄物を単に捨てるのではなく、次へ活かすための取り組みを、コーセー独自ではもちろんですが、専門の技術を持った企業とも連携して行なっています。人体の血液がろ過されながら体内を巡るように、適切な処理を受けた廃棄物が新しい資源として再生する循環型社会を実現するため、廃棄物の種類ごとにスペシャリストと連携しているのです。そこで、今回の社会・環境報告書では、再生の出来ない紙やプラスチックの廃棄物を、工業用燃料とする取り組みを紹介するページを設けました。感想などお寄せいただければ幸いです。

コーセーはこれからも「良い商品」をお届けすることを最優先にまいりますので、いっそうのご指導とご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



04 地球のためにできること

- 05-10 この美しさをいつまでも
- 11-12 コーセーの環境マネジメントシステム
- 13 環境活動推進の組織体制
- 14 環境指標
- 15-18 環境に配慮した製品の開発
- 19 産業廃棄物の削減
- 20 省エネルギー
- 21 環境汚染の防止
- 22 環境負荷データ
- 23 物流部門の環境保全
- 24 オフィス部門でのエコ活動
- 25 その他の取り組み

26 社会とともに在るために

- 27 コーポレートガバナンス・コンプライアンスについて
- 28 お客さまとともに
- 29 社会とともに
- 30 お取引先の皆さま・株主の皆さま・社員とともに
- 31-32 コーセーについて
- 33-34 2008 環境会計

編集方針

コーセーグループでは、環境保全に対する取り組みとその成果を「環境報告書」として2000年より発行してきました。しかし、2005年からは、当社グループを取り巻くステークホルダーの皆さまとの共生を企業経営の重大な課題としてとらえ、CSR(Corporate Social Responsibility)に関する企業活動の内容も報告の一部に加えています。本年もこの考え方にそって「社会・環境報告書 2009」としてまとめました。

なお、本報告書のデータ収集や編集にあたっては、環境省の発行した「環境報告書ガイドライン 2003年度版」、「環境会計ガイドライン 2005年度版」、およびGRIの「サステナビリティレポートガイドライン 2002」を参考にしています。

対象範囲

【対象期間】

実績データについては2008年度(2008年4月1日～2009年3月31日)ですが、一部の項目については過去の推移も併記しました。また、活動内容については、2008年度の内容を中心としましたが、それ以前から継続中のもの、および2009年4月以降のものも一部掲載しました。

【対象組織】

環境保全活動については、株式会社コーセーと生産設備を持つ主要関係会社4社の活動内容やデータを記載しました。社会性についての活動内容は、株式会社コーセーと全ての関係会社の活動から記載しました。

【次号の発行予定】

2010年10月を予定しています。なお、皆さまの声を生かした報告書にしていきたいと考えております。ご意見等ございましたら 株式会社コーセー 地球環境委員会(FAX 03-3281-5901)までお送りくださいますようお願い申し上げます。

地球のためにできること

かけがえの無い地球、その美しい環境を、
私たちは子孫のために、そして地球上に生きる全ての動物、全ての植物の未来のために、
守り、伝えていく必要があります。

環境破壊が懸念されている今日、
私たちひとり一人、そして全ての企業が地球環境のためにできることを
力をあわせて取り組んでいかなければなりません。

コーセーでは1997年に地球環境委員会を発足させて以来、
地球環境の保全を経営活動の重要なテーマとして掲げています。
『環境基本方針』や『環境行動指針』の策定はもちろん、
実行計画として毎年『コーセーエコプラン』を掲げて積極的な活動を展開しています。



この美しさを いつまでも

コーセーは化粧品を通して、お客さまの美しさと心地よい暮らしを守ることを使命としています。
これからの時代良い商品とは、品質の追求だけでなく環境にも配慮したものだ、私たちは考えています。
限りある資源を大切に活かし、地球環境を守り続けることが大切です。
そのためいつも、より有効な資源の利用法を探っています。
その一例が、廃棄物を新型燃料にする取り組み。私たちのささやかな一歩です。
コーセーは、資源がくり返し再利用される循環型社会の実現を目指しながら、
世界中の人々に安心して使っていただくための化粧品創りを進めています。

この美しさを
いつまでも

ゴミを燃料に変える技術が生活も変える

廃棄物ごとのリサイクルを

コーセーでは、廃棄する物を出さない「ゼロエミッション」に力を入れています。不要なプラスチックを新しいプラスチックに、使い終わった紙を再生紙にするマテリアルリサイクルを最優先に考えています。しかし、それを全ての廃棄物で実現させることは難しいため、廃棄物の特性に合わせたリサイクル方法を調査し、最適な形で再利用することに努めています。私たち独自の努力はもちろん、様々なスペシャリストとも連携しながら、より有効に活用する道筋を探っています。

工業用燃料に変える新しい技術

例えば、異素材を組み合わせたものや汚れたものなど、マテリアルリサイクルが難しい廃棄物でも、最近では様々なリサイクル技術が開発、実用化されています。

その一例が、紙を樹脂でコートしたラミネート紙や複合化したプラスチックなど、再生に適さない素材から、工業用の燃料を作るという方法です。

この新型燃料は「RPF (Refuse Paper & Plastic Fuel)」と名づけられ、石炭や重油などの化石燃料の代わりになる熱源とし

て注目されています。コーセーは工場の生産ラインで使用している包装用フィルム、梱包の際にでてくるプラスチック系のもの、原料の袋など、マテリアルリサイクルに向かない様々な廃棄物を「RPF」にリサイクルしています。この技術をいち早く実用化したのは株式会社関商店で、20年近くの実績を持っています。コーセーも10年ほど前から「RPF化処理」をお願いしていることもあり、今回は担当のお二人にご参加いただき、コーセーの地球環境委員3名がRPFの特長や今後の可能性などについておうかがいしました。

資源を繰り返し使うために

コーセーは地球環境を守り、限りある資源を大切に活用し、私たちの豊かで美しい生活をいつまでも持続させるためにも、資源の使用量を抑えて無駄をなくすこと、再生・再利用によって最大限に活かすことが大切だと考えています。資源を繰り返し使うことができれば、またその活動の輪をできるだけ大きくしていくことができれば、いままで「廃棄物」だったものが繰り返し「資源」へと生まれ変わる社会を実現させることができると信じています。

この美しさを
いつまでも

座談会：再生できないゴミから 工業用燃料をつくる

秦 新型燃料「RPF」は工業用の新しいエネルギーとして期待されていますが、関商店さんが取り組まれた経緯についてお聞かせください。



内田 幸雄さん 関商店
常務執行役員 営業物流部長

1991年（平成3年）に日本で初めて、**古紙と廃プラスチックから作る高カロリー燃料RPF**の製造を開始しました。やはり最初は大変でしたね。

土屋 コーセーは、リサイクルできない産業廃棄物は単純焼却した後、アスファルトの路盤材にしていました。もっと有効に活用する方法を探していたとき、燃料化する技術があるという話を聞きさっそく検討を始めて、**コーセー**

の廃棄物がRPF燃料の原料として最適であることをつきとめました。現在、工場の生産ラインで使用している包装用フィルム、梱包の際にでてくるプラスチック系のもの、原料の袋など様々なものを送っています。狭山工場では2名の専任作業員がいて、集めた紙ごみなどの中身を確認してから、プレス機で圧縮して関商店さんに渡しています。

山田 御社からのものは、廃棄物の内容が一定の上、事前に選別して下さっているの助かっています。

木村 RPFはどのように使われているのでしょうか。

内田 現在、製紙会社のボイラー燃料や、石灰会社が岩石を高温で焼くための燃料に使われています。石炭や重油といった**化石燃料の使用量を低減**でき、しかも価格が安



秦 美奈子
コーセー 広報部



土屋 美巳
コーセー 生産部

いので引き合いが多いですね。また、**燃焼後の燃えかすが石炭の半以下**の量で、灰処理の手間も削減できます。このRPFは既存の炉が使えますので、大掛かりな設備投資が不要というのも利点です。

秦 RPFはどのように作るのですか？

山田 原料として受け入れた廃プラスチックや古紙類から、まず**金属類やダイオキシンの原因となる塩化ビニールを徹底的に取り除きます**。御社のものはこの作業が**不要で、安心して利用**できます。そして細かく破碎したあと、RPF専用の機械で、ローラーの摩擦熱を利用して融かし、押し出し成型します。

秦 こうして手にとってみても、元が廃棄物とは思えません。とても軽いものですね。

内田 当初、握りこぶし程度のものを作っていましたが、それだと利用する側に石炭の固まりを流すコンベアーのような設備がないと使えませんでした。そこで**重油や石炭の微粉炭の代替としても使用できる親指程度のサイズ**を開発しました。圧縮空気を利用してパイプラインで送ることも可能です。

山田 日本にRPFメーカーは400社くらいあり、品質も様々です。JIS化によって、水分、発熱量、塩素といった基準値が定められました。特にダイオキシンの原因といわれる塩素は0.3%



山田 雄之さん 関商店
営業物流部

以下という大変厳しい基準値ですが、当社はいち早くJISに準拠したRPFを製造し、化石燃料の代替として、安定的に安心して使える品質の良さをアピールしています。

内田 今後は、食品の空き容器など一般廃棄物を原料としたいのですが塩素分が非常に多いのが難点です。現在、一般廃棄物を炭化、脱塩処理して作るC-RPFというものを自治体と共同開発しています。

木村 海外でも同じような活用はされているのですか？

山田 **海外ではまだまだ「燃やして埋める」というのが主流**です。

日本は国土が狭いので、こういった処理技術が独自に発達したのです。今後は世界各国にも広がっていくものと思います。

内田 各企業の取組みがあり、原料としている産業廃棄物は減っています。

土屋 **コーセーも、プラスチック廃棄物はできるだけ分別して再生**へまわすようにしています。

内田 これからの社会では、プラスチックの使用量自体を出るだけ減らし、何度もプラスチックとして再生して使い、**最後の手段としてRPFのような受け皿がある**というのが理想です。当社としても今後は、RPFだけでなく幅広い取り組みをしていきたいと考えています。

土屋 私たちが取引している業者の方も、本業に加えて社会貢献しているところが増えていています。そういった企業



木村 寛子
コーセー 研究所

廃棄物から作る工業用燃料のRPF



出来上がったばかりのRPF



株式会社関商店

- ・1939年3月創業
- ・事業内容
産業廃棄物の収集・運搬・処理、
RPFの製造販売、環境プラント販売
- ・本社：埼玉県久喜市

コーセーの環境マネジメントシステム

コーセーは環境マネジメントに関する国際規格「ISO14001」の基本的な考え方をもとに、独自の環境マネジメントシステムを導入し、全社をあげてその推進に力を注いでいます。

「環境基本方針」

1. 環境保全に配慮し、省資源、リサイクル、省エネルギー、廃棄物の削減等に努めます。
2. 常に環境負荷低減型の原材料の使用、および商品の研究開発に努めます。
3. 環境関連の法律や規則を遵守し、環境保全に関する社会活動に積極的に参加します。
4. 環境保全活動を推進するための組織を整備し、継続的な活動を展開します。
5. 環境保全に関する教育、広報活動等を通し

コーセーは企業として材料・資源の減量化の推進やリサイクル材料の積極的活用、廃棄の容易な材料を活用した商品化、工場やオフィスなど全ての事業所での廃棄物の減量化と分別収集の徹底などを目指した企業活動を展開していきます。

環境汚染を防ぐために、特定材料や原料の削減、使用禁止等についてはガイドラインを作成して徹底させています。また、環境にやさしい原料や材料の研究開発も積極的に進め、商品化に生かしたり、包装材料の簡素化や軽量化に役立てています。

容器包装リサイクル法等を遵守するだけでなく、工場排出物等に関しては社内規制を強化して環境汚染の防止に努めるとともに、各事業所周辺の環境向上運動や地球環境保全事業への積極的支援なども行っています。

1997年に地球環境委員会を設置し、活動の推進と関係各部門への働きかけを組織的に行うとともに、ISO14001に基づく環境マネジメントシステムを積極的に導入し、実施しています。

活動の原点はまず社員からということで、社員向けの小冊子『ECO BOOK』を発行したり、職場におけるエコ改善事例や提案等の

「環境行動指針」

1. 環境汚染の防止をはかるために
2. 省資源、省エネルギーを推進するために
3. むだのない廃棄物処理、リサイクルをはかるために
4. 環境に配慮した原料、材料を開発し、商品化に応用していくために

- 私たちを取り巻く地球環境を汚染したり破壊する可能性のある 特定材料、原料の使用禁止や削減に取り組みます。
- 工場排出物に関する社内基準を設け、規制強化を行います。

- 可能な限り資源、材料の減量化に努めます。
- それぞれの職場において節電、節水など省エネルギーに努めます。

- リサイクル資源の積極的利用に努めます。
- 廃棄しやすく、また廃棄されても環境汚染につながらない材料 での商品化に努めます。
- 工場をはじめ各事業所における廃棄物の減量化、および分別収集に努めます。

- 環境にやさしい原料や材料の開発に積極的に取り組みます。
- 商品材料の簡素化、共通化をはかり、省資源の実現に努めます。

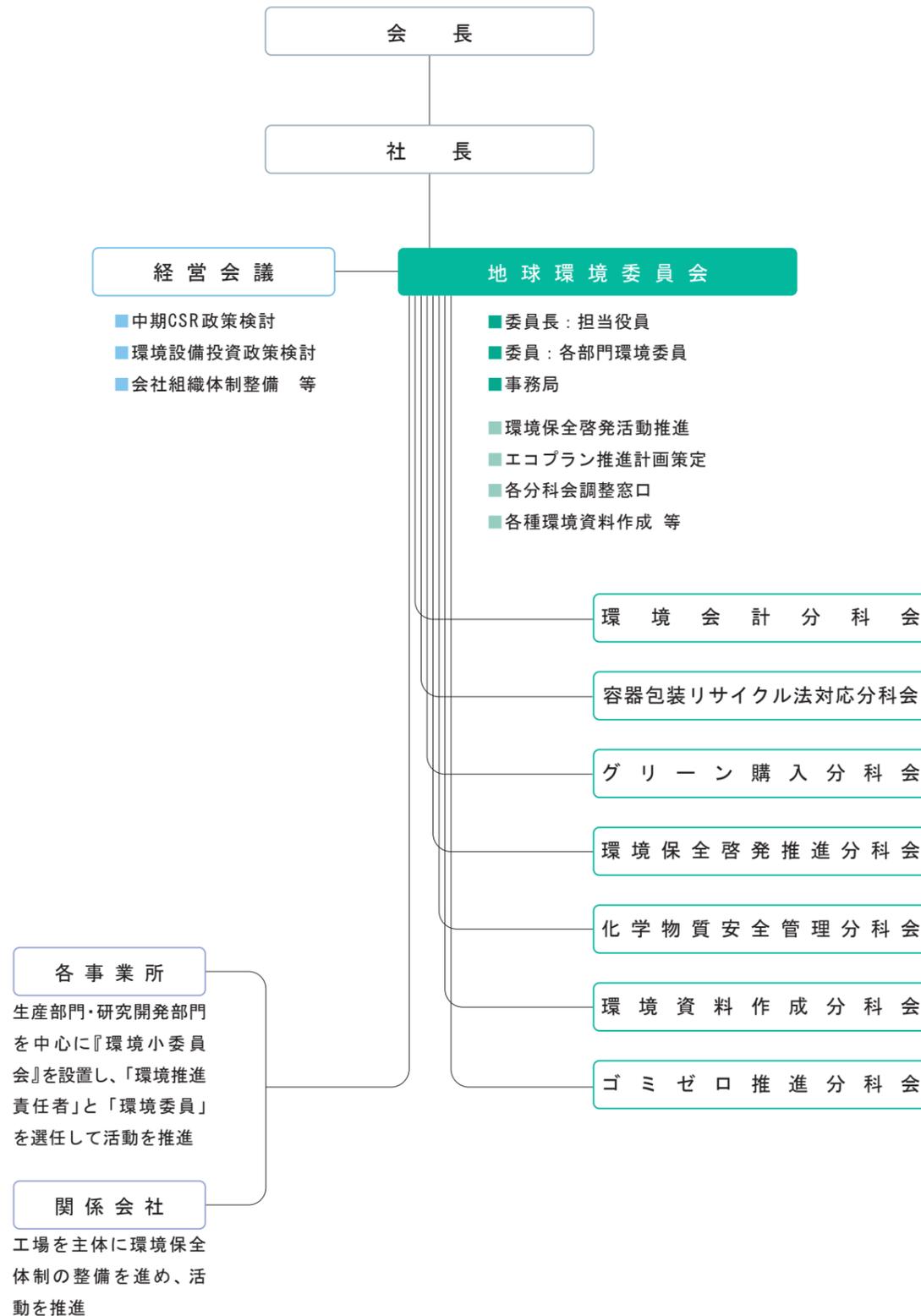
環境マネジメント

コーセーの環境活動の推進母体は地球環境委員会ですが、活動の実施運用にあたっては各部門がコーセーエコプラン推進計画を作成しています。地球環境委員会は実施状況等のチェックを行ない、全社環境保全活動のPDCAサイクル（P=Plan：計画、D=Do：実施、C=Check：検討、A=Action：処置）をまわすように努めています。



環境活動推進の組織体制

コーセーの環境マネジメントシステムを推進する組織体制は、環境保全活動を含めCSR活動に関するトップマネジメント決議機関として『経営会議』を位置付け、中期CSR政策や方針について討議決定を行っています。全社実行機関としては『地球環境委員会』が中心になり、各部門にかかわる専門的環境テーマについては各分科会を設置し、改善をはかっています。



環境指標

コーセーの地球環境委員会は、環境保全活動を推進するにあたって、6項目の目標を環境指標として策定しています。指標は前年度の実績や社会のニーズに合わせて毎年見直しを実施しています

1. 環境汚染物質の管理・自主的削減	2. 環境に配慮した製品開発の促進	3. 産業廃棄物の削減
<p>環境指標</p> <p>法規制等に対応するだけでなく自主的にその内容を公表し、管理していく</p> <p>2008年度の実績</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 環境を汚染する可能性のある物質は使用量の削減に努めるとともに、その使用量を迅速に把握できるシステムによって許容範囲内であることを厳守している <p>2009年度の目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 環境を汚染する可能性のある物質の管理徹底、および自主的削減の継 	<p>環境指標</p> <p>1998年発行の『ECO BOOK 商品企画・設計編』で設定した「容器包装形態エコ基準」に準じた新製品開発を促進する</p> <p>2008年度の実績</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 製品材料のエコ購買の拡大 ● 再生樹脂等リサイクル原料の使用拡大 ● エアゾール製品に残ガス排出機構を導入 ● 点字表示つき製品の拡大 (2008年度の詳細については15ページをご覧ください) <p>2009年度の目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 環境に配慮した製品開発をさらに 	<p>環境指標</p> <p>単なる廃棄処分を避け、可能な限りリサイクルを実施して廃棄物の削減をはかる</p> <p>2008年度の実績</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 2006年度の実績278.3kg/1000打に対して、282kg/1000打となり、微増するという結果になった。しかしリサイクル率に関しては、99.5%以上の達成を継続した (2008年度の詳細については19ページをご覧ください) <p>2009年度の目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 最終処分場で処理される量を2006年度レベルの98.5% (原単位
4. 省エネルギー	5. 環境マネジメントシステムの推進	6. 環境保全への啓発活動の推進
<p>環境指標</p> <p>無駄なエネルギー消費をなくし、地球温暖化防止に企業として取り組む</p> <p>2008年度の実績</p> <ul style="list-style-type: none"> ● CO₂排出量に換算して732kg/1000打を達成。これは2006年度の実績747kg/1000打を大きく下回っただけでなく、2009年度目標の743kg/1000打(0.5%減)もクリアした (2008年度の詳細については20ページをご覧ください) <p>2009年度の目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 省エネルギー活動はそのまま推進して、実績の維持に努める 	<p>環境指標</p> <p>生産部門、物流部門を中心に国際規格『ISO14001』に則った環境マネジメントシステムの推進、徹底をはかる</p> <p>2008年度の実績</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 生産部門、物流部門、および関係会社との連携をはかりながら、『ISO14001』の維持強化に努めた <p>2009年度の目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 生産部を中心にさらなる環境マネ 	<p>環境指標</p> <p>全社員ひとりひとりの環境意識を高める活動の推進をはかる</p> <p>2008年度の実績</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 全社員対象のエコ活動事例やエコ川柳の募集と表彰 ● 社内報における環境関連の情報及び活動を紹介 ● 新入社員に対して環境保全教育を実施 <p>2009年度の目標</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 環境保全への啓発活動継続

環境に配慮した製品の開発 ②

限りある資源を守るために

コーセーでは使い終わった後の化粧品の容器包装を貴重な資源として再利用するために材質の選定に配慮したり、再生プラスチックや再生紙などリサイクル素材も積極的に採用しています。また、天然資源の枯渇に考慮して、非木材紙や再生紙の積極的活用も推進しています。

異なった材料を使った容器を分離しやすく ①

●ガラス瓶を採用しているインフィニティやプレディア スパ・エ・メールなどの製品では、ガラス瓶の部分とプラスチックの肩カバーを簡単に着脱できる機構を採用し、ガラス瓶のリサイクルをしやすくしています。

化粧品容器にもリサイクル原料を使用 ②

●プラスチック製の化粧品容器に再生樹脂原料を極力活用し、バージン材料の使用削減に努めています。特にPET(ポリエチレンテレフタレート)樹脂、PP(ポリプロピレン)樹脂、PE(ポリエチレン)樹脂、色見本サンプルや口紅成型カプセルに使用されるSAN(アクリルニトリルスチレン)樹脂、キャップ等に使われるABS(アクリルニトリルブタジエンスチレン)樹脂、そして口紅の製造に使用するPS(ポリスチレン)樹脂、などがリサイクル原料を使用しています。

●化粧品の容器にリサイクル原料を積極的に使用していますが、コーセーコスメポート モイスチュアマイルドHAシリーズやコスマジック シリーズでは「PETボトル リサイクル推奨マーク」の認定を取得し、製品に表示しています。

3層構造の開発で再生樹脂の使用が可能に ③

●製品の性格上、バージン材料を使いたいファンデーションのレフィルの包装容器では、再生PET樹脂の両側をバージンPET樹脂ではさむ3層構造技術を開発、大幅な新規材料の低減につなげています。2005年からほとんどのレフィル容器で採用していますが、2008年度はボーテ ド コーセー アルティメーション シリーズのファンデーションなどが加わりました。

バキューム成形容器も再生樹脂を使用

●ファンデーションのレフィル容器に採用している3層技術を、バキューム成形の容器やプリスターカバーの一部にも活用しています。スポーツビューティ ファシオ、ホワイティストなどのブランドや店頭宣伝物のバキュームトレイへも応用しています。

非木材紙の利用 ④

●バガス(サトウキビの絞りかすを原料とした紙)やケナフ紙(1年草のケナフを原料とする紙)など木材のパルプを使わない非木材紙の活用も積極的に進めています。

2008年度もジルスチュアート シリーズのフルーツ&アルマミストやイルミナンスアイズなどでケナフ紙を使った1個箱を採用しました。

再生紙の活用 ⑤

●製品の1個箱や能書、パンフレット、ダンボール箱等化粧品の包装にまつわる全てのもので再生紙の使用率を高める努力を推進しています。現在ではほぼ全てのブランドで再生紙を使用していますし、能書も全て再生紙を採用しています。

箱能書の採用 ⑥

●製品の1個箱(外箱)の一部に化粧品の使い方など能書にあたる説明文を直接印刷し、紙による能書の添付をしない製品を増やす努力をしています。2008年度の能書削減効果は1,300万枚以上ののぼり、1枚を1.5gとして計算すると19.7tとなり、直径14cm長さ8mの樹木30本分となります。また、この30本の樹木が1年間に吸収するCO₂の量は8tにも及びます。



産業廃棄物の削減

コーセーは2008年度も、生産部門、物流部門を中心に廃棄物量を削減する努力を続けてきました。単なる廃棄処分を極力避け、可能な限りリサイクルを実施することを基本方針として取り組んでいます。

目標（環境指標）

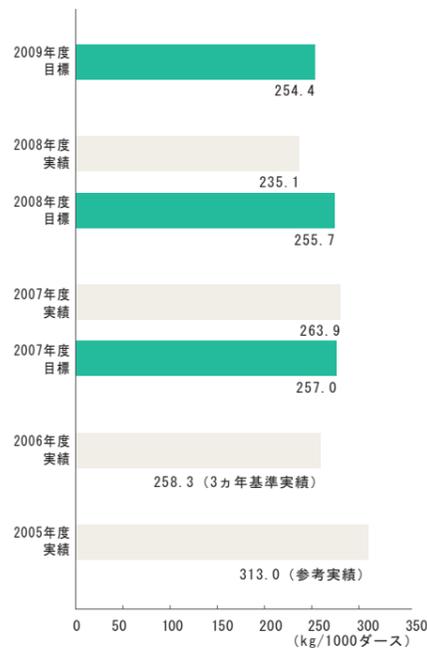
生産段階における産業廃棄物の発生量を、2009年度までに2006年度レベルの98.5%（原単位）にする3ヵ年計画を策定し、単年度0.5%ずつ減らすことを目標として廃棄物発生量の削減を推進します。また、リサイクル率99.5%以上の維持管理を目標としてリサイクル活動を推進します。

2008年度の実績

2008年度目標255.7kg/1000ダース（0.5%）の削減計画に対して、結果は235.1kg/1000ダース（達成率108.8%）となり、目標数値を大幅にクリアすることができました。在庫管理システムの精度向上なども寄与していると考えられますが、2009年度も254.4kg/1000ダースという目標のクリアに向けて取り組んでいきます。リサイクル率はすでに99.5%以上を達成しているため、引き続き、この実績を踏まえて、さらなる廃棄物発生量の削減、リサイクル活動の推進に力を注いでいきます。

産業廃棄物量の現状と今後の目標

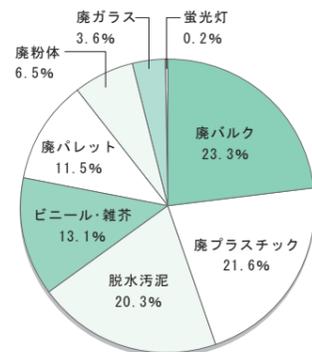
●原単位廃棄物量の推移(kg/1000ダース)



産業廃棄物のうちわけ

狭山工場や群馬工場を中心として、コーセーグループの各生産拠点ではリサイクルの推進に積極的に取り組んでいます。そのため、2000年度から単純廃棄される産業廃棄物の量が大幅に減少し、現在では99.5%以上の産業廃棄物がリサイクル化されています。また、2004年から新たな生産・販売・在庫一貫管理システムを導入したため、準備段階で一時的に廃棄量が増えましたが、2008年度実績から減量効果が出始めました。

●産業廃棄物のうちわけ(狭山事業所の例)



リサイクルの推進

コーセーグループの生産部門では、発生した廃棄物を単純に“捨てる”のではなく、再び資源として社会に還元することを目標としたリサイクル活動に力を入れています。基本的な考え方はマテリアルリサイクルを最重点にケミカルリサイクル、サーマルリサイクルも併用し、焼却処理や単純廃棄を極力なくすことにしています。この方針にそって、各職場において分別・回収を徹底し、リサイクル率の向上、廃棄物量の減少に努めています。

2008年度は、生産・在庫・販売の連携体制が進み、廃棄物の発生量そのものが減少しました。また、必要に応じてリサイクル業者の見直しを行い、適正な処理の実施を常に監視しています。

(注)

マテリアルリサイクル：材料をそのまま利用するリサイクル(例えばプラスチックからプラスチックへ、紙から紙へリサイクル)
ケミカルリサイクル：何らかの化学的なプロセスによるリサイクル(リサイクル原材料を別のかたちにして利用)
サーマルリサイクル：リサイクル原材料を利用して熱として回収するリサイクル

主な廃棄物	リサイクル手段
脱水土泥	堆肥化
バルク	燃料
廃粉体	堆肥化
ブラゴミ・雑芥	固形燃料
プラスチック	再生プラスチック
ガラス	路盤材
その他	熱回収・路盤材

*掲載データは主力生産拠点(狭山事業所・群馬事業所)の環境データですが、関係会社の生産拠点も含めた全体の96%をカバーしています。

省エネルギー

コーセーは2008年度も、引き続き無駄なエネルギー消費をなくし、地球の温暖化防止に企業として取り組むことを基本方針とした活動を行ってきました。

目標（環境指標）

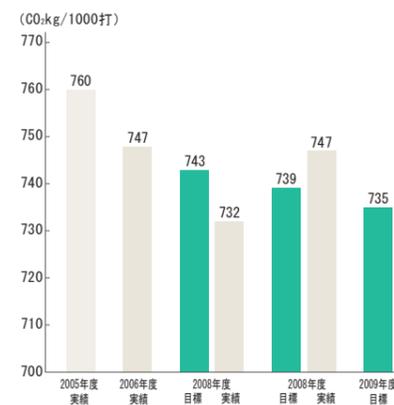
生産段階における二酸化炭素(CO₂)の排出量を、2009年度までに2006年度レベルの98.5%（原単位）にする3ヵ年計画を策定し、省エネルギー活動を推進します。単年度単位の削減目標は毎年0.5%です。

2008年度の実績

2008年度は3ヵ年計画の2年度目にあたり、目標としたCO₂排出量 739kg/1000ダース(0.5%減)の計画に対して、実績は747kg/1000ダースと目標達成率が98.9%という結果でした。この要因は電力の二酸化炭素係数値の悪化によるもので、エネルギーの実使用量は前年以下でした。

二酸化炭素換算した場合のエネルギー使用量の現状と今後の目標

原単位二酸化炭素排出量(kg/1000ダース)



エネルギー使用量の現状と今後の活動

生産部門におけるエネルギー使用量は、省エネルギー活動の展開によって減少を続けてきましたが、最近若干増加傾向にありました。その理由は、生産量にかかわらず工場の稼働に必要な光熱費が固定的であり、生

産量が増減によって原単位あたりのエネルギー使用量が影響を受けたからです。この問題を改善するために、2008年度は群馬事業所のボイラー燃料を灯油から天然ガスに切り替えました。省エネ効果、固定費の削減効果が出始めているので、順次狭山事業所や関連会社でも導入していく予定です。



天然ガスボイラーを導入

2008年度の省エネルギー活動事例

2008年度は環境負荷低減活動を推進するため、大規模な設備投資を実施しました。中でも群馬事業所では、ボイラー設備を灯油使用から天然ガス使用のものにかえて燃料転換を行いました。こ

の結果、大幅な燃料削減だけでなく、CO₂の削減にもつなげることができました。また、狭山事業所では、主力エア供給設備を省エネタイプのものにかえて使用電力量を低減させました。さらに、生産部門で働く従業員に対して省エネ意識、環境負荷への意識を高める活動を継続して行うとともに、職場パトロールを定期的実施して空調や生産設備、厚生施設などに無駄な部分の改善に努めています。

省エネルギー運動を組織的に展開

コーセーでは企業の社会的責任の一環として、環境への影響を配慮し、2000年度に群馬工場、2002年度に狭山工場、2003年度に関係会社の工場と狭山事業所の物流部門でISO14001の認証を取得しました。省エネルギー活動に組織的に取り組み、単に監視やチェック活動だけでなく、建屋や構造設備などのハード面と運用するソフトの両面から省エネルギー技術を導入しています。また、新たな設備の導入、既存の構造設備の点検・改造に関しても、一定の基準を設けて可能な限り環境への配慮を実施しています。



省エネ型コンプレッサーを導入

*掲載データは主力生産拠点(狭山事業所・群馬事業所)の環境データですが、関係会社の生産拠点も含めた全体の96%をカバーしています。

環境汚染の防止

コーセーは2008年度も、環境関連法規の遵守はもちろん、グループ全体で環境負荷要因を極力減らす努力を続け、環境への汚染等の防止に努めてきました。

法規制の遵守

環境基本法をはじめとする環境関連の各種法規制、条例や地域協定の遵守を徹底するために、ISO14001に適合した法規制への対応を実践しています。特に生産・物流部門では独自に設定した統一の『環境マニュアル』に従って事業所ごとに、また関係会社の工場ごとに対応しています。また、将来の法制化にもすみやかに対応できるよう法規制の動向も常に監視しています。

化学物質への対応

化粧品は身体に直接使用するものなので、製造段階でも有害な化学物質を使用することはありませんが、まれにPRTR法(特定化学物質排出量の把握・管理促進法)等、化学物質の管理に関する法や条例の適用を受ける物質を使用する場合があります。

コーセーでは対象となる化学物質をどれだけ環境の中に排出したかを監視・測定するシステムを構築しています。この監視・測定システムの運用によって法律に厳密に対応するとともに、これらの化学物質の使用や排出の削減に努めています。

なお2008年度実績では届け出対象となる化学物質の使用は2種だけでした。

洗浄污水のクリーン化

生産プラントは製造作業終了後に水等で洗浄する必要があります。しかしコーセーでは関係会社の生産施設を含め、生産プラントに付着したバルクを洗い流す前に回収作業を行うことによって、洗浄汚水量の削減に努めています。また、場合によっては初期洗浄水も回収して、洗浄污水が廃水処理場へ流れ込むことを避ける工夫をしています。

群馬事業所におけるボイラのガス化

従来、群馬事業所では灯油を燃料としたボイラを4基使用していたが、原油の高騰への対処やCO₂の削減のために、天然ガス使用のボイラへと転換工事を実施しました。生産施設が稼働中に工事をする必要があるため、工期3ヶ月という短期間で工事を行い、2008年7月には全てのボイラのガス化を達成しました。効果の測定はこれからですが、経費はもちろん、CO₂も灯油ボイラより25%の削減効果が見込まれています。

環境関連投資

環境負荷をできるだけ低減させていくために、毎年環境に関わる投資も積極的に実施しています。2008年度に実施した環境投資の例をご紹介します。



遮熱塗装を行った屋根

●狭山事業所における環境関連投資

件名	環境的側面
生産施設の屋根に遮熱塗装工事(3棟実施)	省エネルギー
工場内通路照明の自動化	省エネルギー
事業所内不要設備の撤去工事	大気汚染の防止
井戸受水槽清掃工事	地盤沈下 水質汚濁防止
排水処理施設の定期整備工事及び排水処理安定稼働増強工事	水質汚濁防止
ダンボールの緩衝材への再利用	社内リサイクル
井戸純水専用配管工事	地盤沈下 水質汚濁防止
事業所内分煙化の促進	事業所内分煙化の促進 受動喫煙防止
バッテリー駆動フォークリフトの更新	大気汚染の防止
新型エアコンプレッサーの導入(2台)	省エネルギー
粉体製造室空調装置の煤塵フィルター交換工事	大気汚染の防止

狭山事業所、群馬事業所の環境負荷データ

コーセーの事業範囲は関係会社を含めてそのほとんどが化粧品です。生産も主要拠点である狭山事業所と群馬事業所への集中度が高いことから、2008年度の環境負荷データもこの2工場に絞ってまとめました。ちなみに、2008年度の環境会計につきましては、33-34ページをご覧ください。

	今年度	前年との増減量
電気エネルギー	12,379 (単位/1000kw)	△330
重油・灯油	509 (単位/1000L)	△478
天然ガス	376 (単位/1000Nm ³)	376
水	253 (単位/1000m ³)	±0
原料	8,943 (ton)	△465 (ton)
容器・包装材料	6,628 (ton)	△115 (ton)

INPUT

コーセー主力工場(2拠点)



狭山事業所



群馬事業所

	今年度	前年との増減量		今年度	前年との増減量
大気への排出	CO ₂ : 7,384.00 (ton)	178 (ton)	化学物質の排出 (PRTR対象物質)	大気: 0 (ton)	±0
	NOx: 2.99 (ton)	△2.53 (ton)		産業廃棄: 0 (ton)	±0
	SOx: 0.48 (ton)	0.04 (ton)			
工場排水の排出	排水量: 164 (単位/1000m ³)	4	産業廃棄物の搬出	総排出量: 2,324.0 (ton)	△453.8 (ton)
	BOD: 18.13 (ton)	△1.3 (ton)		再資源化: 2,320.5 (ton) *	△454.4 (ton)
	SS: 5.69 (ton)	△1.59 (ton)		単純焼却: 3.5 (ton)	3.5 (ton)
	n-Hex: 0.50 (ton)	0.034 (ton)		埋立処分: 0 (ton)	△2.9 (ton)

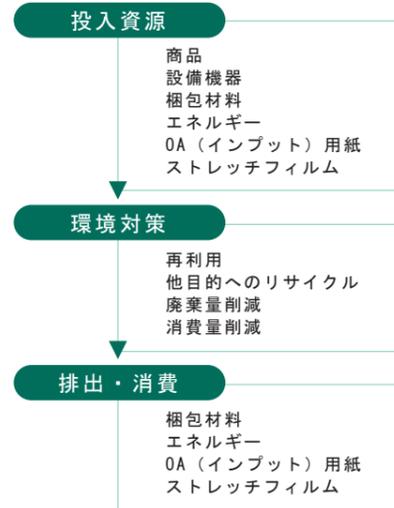
OUTPUT

*再資源化の内訳
 マテリアルリサイクル1,860.3(ton) [△226 ton]
 ケミカルリサイクル 331.2(ton) [41.1 ton]
 サーマルリサイクル 129.0(ton) [△269.5 ton]
 []内の数字は前年との増減量です。

物流部門の環境保全

コーセーグループの物流段階における環境保全対策は、2008年度も引き続き物流の効率化、資源や副資材の節約と再利用、リサイクルの促進をテーマとして活動を展開してきました。使用済みのOA用紙やダンボールの再利用に加えて、ストレッチフィルムの再資源化にも取り組んでいます。

物流における環境対策の流れ



コーセーの流通センター網

物流の効率化と販売面でのサービス向上をはかるために、全国で6カ所の流通センターが稼動していますが、すべての事業所で環境保全活動を実施しています。中心となる狭山流通センターは2003年11月にISO14001の認証を取得して以来、6つの流通センターで継続して環境改善運動に取り組んでいます。

北海道流通センター（北海道恵庭市）

東北流通センター（福島県須賀川市）

狭山流通センター（埼玉県狭山市）

名神流通センター（滋賀県湖南市）

中四国流通センター（岡山県笠岡市）

九州流通センター（福岡県古賀市）

流通センターでの活動内容

1. リデュース（発生の抑制）

■産業廃棄物の低減活動

お客様に直結する販売部門等に対して、商品や宣伝物品の在庫情報をきめ細かくフィードバックできる体制を確立し、過剰生産の防止や物品の利用促進をはかることによって、廃棄物量を少なくする努力を続けています。

■エアコン温度のコントロール

生産施設のエリアごとに温度計を設置するとともに、定期的に室内温度を計測して暖房や冷房の温度設定値を常にコントロールしています。

■待機車両のエンジン停止

配送業者の協力によりセンター内でのエンジン停止を励行。狭山流通センターでは埼玉県条例のアイドリングストップを遵守するため、ドライバーの休憩所や喫煙所を設置しています。

■輸送方法の改善

環境保護の観点から鉄道コンテナ輸送も積極的に利用しています。12ftコンテナに加えて31ftウイングコンテナも活用して、輸送効率と積み下ろし作業の効率をアップさせました。

■コピー用紙、OA用紙の削減

不要コピー紙ボックスを各所に設置し、社内連絡用に使用する書類は裏面利用の両面コピーを励行しています。

2. リサイクル（再資源化）

■紙類やストレッチフィルムの再生
両面コピー後に不要となった書類、上質紙、新聞紙等は分別してリサイクル業者へ引き渡しています。また2008年度から、荷くずれ防止のために使わ

れるストレッチフィルムについても仕分けしてリサイクル業者に引き渡すようにしました。

■産業廃棄物のリサイクル

産業廃棄物の単なる焼却処分を廃止し、焼却熱を熱機関運転に活用したり、焼却灰を路盤材にするなどして100%リサイクルを達成しています。

3. リユース（再利用）

■ダンボールの再利用

物流のために使われたダンボールは、固定用のガムテープや宛名シール等をはがして再利用を徹底しています。

■廃棄ダンボール等の緩衝材への利用

再利用を何度か行なった後で使えなくなったダンボールは、加工して輸送用の緩衝材等に。廃ダンボールを加工するエコネット機を導入しています。

■輸送用小箱の再利用

コーセーでは小型サイズの商品を生産する場合、完成品を入れるために通常のダンボール箱サイズの1/4や1/8という上蓋無しの小箱を使っていますが、各流通センター間では、この小箱のままダンボール箱に入れて輸送しています。また、小箱を折りたたんで回収できるようにワンタッチ組み立て式のものに改良し、繰り返し利用しています。このため、再利用率と運搬効率がアップしました。

オフィス部門でのエコ活動

コーセーでは各事業所のオフィスでも環境活動に取り組んでいます。事務用品のグリーン購入の推進、事務機器の省電力製品への切り替え、分別ボックスの設置による分別収集の徹底、休憩時間の消灯による節電、エアコンの温度設定の管理等の活動を実施しています。

オフィスゴミ スリム化宣言で3R運動を実施

コーセーのコーポレートメッセージは「美しい知恵 人へ 地球へ」です。この考えを実践するために、全社員に『オフィスゴミ スリム化』活動への参加を呼びかけています。具体的には、各自の職場でできるエコ活動として、ゴミをできるだけ出さないReduce（リデュース）、両面コピーや封筒の使いまわすなど再使用に心がけるReuse（リユース）、ゴミを分別して廃棄するRecycle（リサイクル）という3R運動を提唱しています。

チーム・マイナス6%への参加

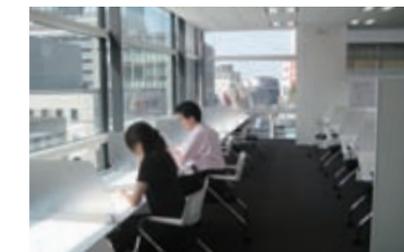
国民参加運動として活動を続けている『チーム・マイナス6%』に、コーセーもその趣旨に賛同し、企業として登録するだけでなく、社員にも参加を呼びかけています。パンフレットや社内報で、この運動について家庭内で話題にしてください、温室効果ガス削減への取り組みをしてください、この運動に賛同したらご家族で登録してください、という3つのお願いをしています。

日本橋オフィスが「日経ニューオフィス賞」を受賞

コーセーの新しい日本橋本社オフィスは2008年8月に新しいビルとなりました。新しいオフィスを創るにあたっては、部門横断型のプロジェクトチームを立ち上げ、環境保全面への配慮とともに、人と人のコミュニケーションや働きやすさという就業環境を重視しました。ライブラリーカフェやミーティングエリア、リフレッシュエリアなどを設け、開放的で気あふれるオフィス空間を創出しました。この本社オフィスは日本経済新聞社と社団法人ニューオフィス推進協議会が主催する第22回日経ニューオフィス賞で「日経ニューオフィス推進賞」を受賞しました。



日本橋オフィスの正面玄関



共同のワークスペース

全社で事務用品のグリーン購入を推進

コーセーの全事業所では、コピー用紙やプリンター用紙など日常業務で使用する紙は全て再生紙に切り替えています。また、取引先企業の協力をいただいて独自の推奨事務用品カタログ『グリーンブック』を作成してグリーン購入の普及に努めています。現在、名刺をはじめボールペン、サインペン、蛍光ペン、鉛筆などの筆記用具からファイル、ノート類、消しゴム、付箋紙、のり、スタンプ台、のし袋などがグリーン購入に切り替え済みです。また、定期的に「グリーン購入ネットワーク」等から最新情報を収集して活動の推進に力を注いでいます。

その他の取り組み

製品の開発や製造、物流など各段階での環境保全への取り組みとあわせて、コーセーでは社内、社外に向けた環境保全活動も展開しています。もちろん企業と地域社会との連携も重要な課題であり、積極的に活動の輪を広げていきたいと考えています。

カーボンオフセットを実施

様々な経済活動や日常生活で排出されるCO₂などの温室効果ガスの排出量を算出し、その分を植林や植樹で埋め合わせるカーボンオフセットが話題になっていますが、2008年度はコーセーコスメポート サロンスタイルのトライアルセットで実施しました。売上の一部でカラマツの木を中国の蒙古自治区内に植林しますが、パッケージに『“サロンスタイルの森” 創立 地球温暖化を防止していこう』というメッセージを表記しました。



環境団体への参加・協賛

コーセーは様々な環境団体の活動にも参加しています。例えば、グリーン購入を積極的に推進するためにグリーン購入ネットワークに参加したり、廃棄物のリサイクルを促進するために、特定事業者である財団法人日本容器包装リサイクル協会に委託しています。

また、コーセーの発行する提携クレジットカード『コーセーカード』は、利用者の使用金額に応じてコーセーが地球環境財団への寄付を行うという付加機能を持っていますので、カード利用者は特別な出資をすることなく地球環境へ貢献していることになります。

エコ活動事例・エコ川柳の募集

コーセーでは社員の環境保全に対する関心を高め、環境活動への啓発をはかる活動の一環として、毎年12月をエコ推進月間と位置付けています。全社員、全事業所を対象として社内キャンペーンを展開するほか、全社員、全部門を対象としてエコ活動事例とエコ標語の募集を行っています。この活動は1999年にスタートし、2008年度で10回目となりました。そのため従来のエコ標語を今回はエコ川柳の募集に切り替えました。

エコ活動事例表彰



【最優秀賞】

容器包装資材の削減

(商品デザイン部、企画部、商品開発部合同チーム)

別個包装が主だった用時混合型商品の2連ラミネート化を提案し、使用包装材の量を大幅に削減させた。



使用時に一方のラミネートの中身を指で押し出し、もう一方と混合する新型容器

【優秀賞】

九州地区で、化粧品3社による共同配送を実施 (ロジスティック部)

【生産・物流部門賞】

■クリーム等を製造するプラネタリミキサーの「かきとり棒」を改善し、廃棄されるバルクを削減

(狭山工場製造課)

■メイクアップ製品の製造に使われるスラリー充填機の洗浄方法を改善

(狭山工場生産課)

■口紅やアイメイクアップ等小型製品化粧箱改良による包装材料の削減

(生産技術センター)

【販社・研究部門賞】

■ゴミ分別活動の徹底でコスト削減とオフィスの美化を推進

(八王子支店)

■不要になったダンボールの再利用推進

(熊本支店)

■エコバッグ持参活動の推進

(関西第三支店)

【エコ川柳優秀賞】

■紙一枚 社員全部で 五千枚

(狭山工場品質管理課 女性)

■ゴミ箱のメタボ対策 ゴミ分別

(群馬工場品質管理課 男性)

■昔ケチ 今じゃエコだと褒められて

(中部ストア支店 男性)

社会とともに在るために

コーセーグループは化粧品を通して、人間の美しく豊かな生活に深くかかわっている企業として、『美しい知恵 人へ地球へ』を企業メッセージとして掲げ、世界中の人々と、またその人々が暮らす社会と、そしてかけがえのない地球とともに、常によりよき関係を追求していくことを大切に考えています。とりわけ、お客さまや株主の皆さま、地域社会や国際社会、お取引先、コーセーに働く社員という私たちを取り巻くすべての方々との共生を第一に掲げて企業活動を行っています。

コーポレートガバナンス・コンプライアンスについて

コーセーグループは企業価値を高めるためにもコーポレートガバナンスの強化に積極的に取り組み、健全な経営を遂行する組織体制を整備しています。

コーポレートガバナンス体制

コーセーは全てのステークホルダーとの共生を企業経営の重要な課題ととらえ、コーポレートガバナンスの改革に取り組み、透明性、公正性の高いコミュニケーションをはかっています。そのため、取締役会と監査役会により業務遂行の監督・監視を行う監査役制度を採用しています。また業務遂行の効率化をはかるために執行役員制度を導入し、経営に関する重要な事項を協議するために経営会議を設置しています。なお、全社的なコンプライアンスを実施・確保するためにコンプライアンス委員会を設置するとともに監査役2名は当社と利害関係のない独立性のある社外監査役としています。

コーセーの精神は

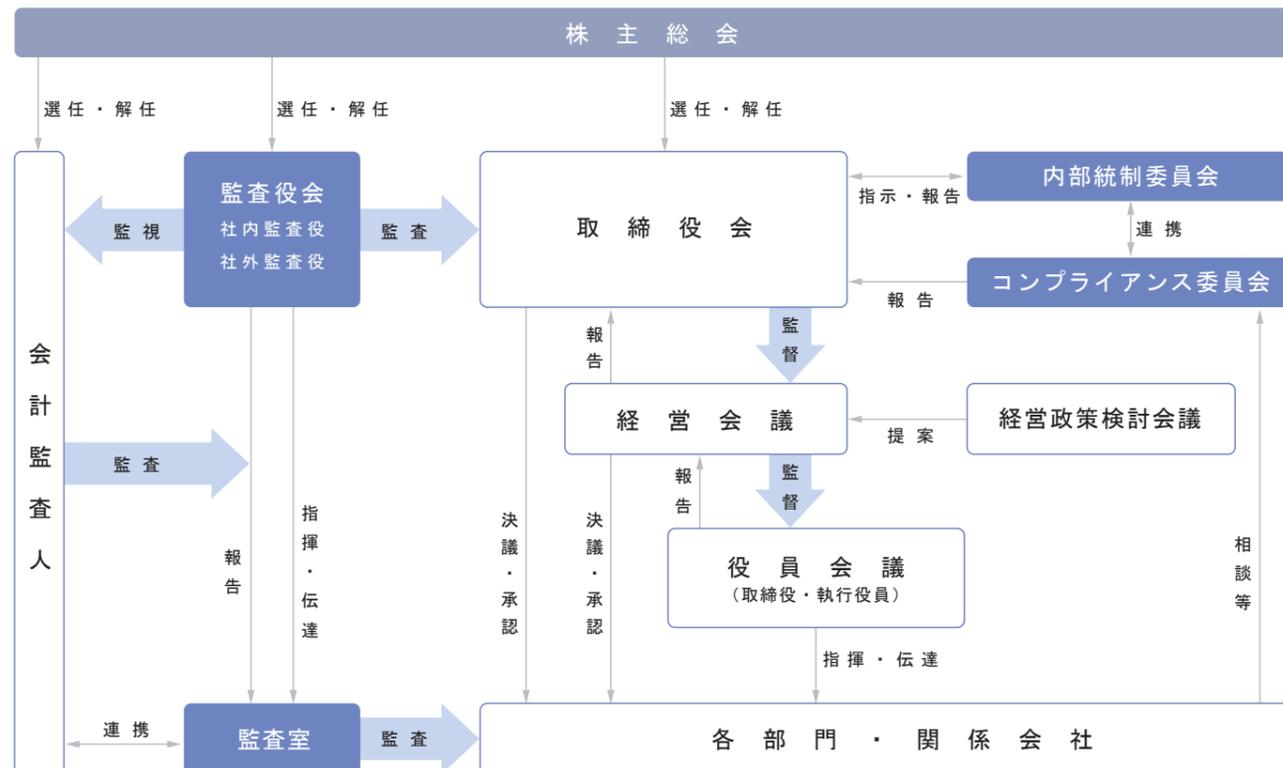
「正しきことに従う心」

コーセーの企業倫理に対する取り組みは、コンプライアンス（法令遵守）はもとより広く社会を含めたステークホルダーと共生をはかり、信頼性の高い企業であり続けるために、「コーセーグループ 行動指針」を策定して、コーセーグループで働く全ての人の行動規範としています。この「行動指針」は、基本的理念として、当社グループの創業者である小林孝三郎が座右の銘としていた「正しきことに従う心」を掲げています。

コンプライアンス研修に

e-ラーニングを導入

「中期経営計画」の課題の一つにコンプライアンスの強化を掲げていますが、全社員のコンプライアンス意識を高めるために、インターネットを利用したe-ラーニングによる「コンプライアンス研修」を実施しました。2008年度は全社員（契約・パート社員含む）を対象として、コンプライアンスの基礎をテーマに行いましたが、2009年度以降は項目別に応用的な内容で実施していく予定です。



お客さまとともに

コーセーグループは、美の創造企業として、お客さま一人ひとりの生活がより健やかで、より美しく、充実したものになるように支援していくことが使命であると考えています。

お客さまの声を製品に生かす

コーセーでは愛用者とのコミュニケーションの窓口として「お客さま相談室」を開設しています。使い方の説明や肌についてのお問い合わせ、商品に対するご意見などに、専門のスタッフが対応していますが、中でも商品に対するご提案は、社内の関係部署に素早く伝達する「スマイルデータシステム」を構築し、運営しています。このシステムによって改良された例にハッピーバスデイシリーズのボトルデザイン、シャンプーの詰め替え容器の注ぎ口の変更、アイライナー容器の表示方法などがあります。



ハッピーバスデイシリーズはお客さまの声で倒れにくいボトルデザインに変更

商品の選びやすさに工夫

株式会社コーセーコスメポートでは、お客さまが化粧品を選ぶときや使うときに、誰でもが間違わないように、商品のユニバーサルデザインに力を注いでいます。前からシャンプーの容器には識別用の刻みを入れていましたが、最近では点字表示入りやカラーバリアフリーに配慮したアイテムを増やしています。

■パッケージに点字表示を

化粧品には外観が似ている商品があるため、視覚に障害をもつ方でも間違わずに選んだり、使えるように、パッケージに点字表示を積極的に取り入れています。商品の容器にはもちろん、キャップや化粧箱、キャッチシール、チューブ容器のシャッキング部分などに合わせて商品ごとに点字表記の位置を決めています。現在、ソフティモシリーズやサロンスマイルシリーズなどをはじめ71種の商品で実施しています。なお、この取り組みは社団法人日本包装技術協会から包装技術の研究・改善・向上に貢献したとして「木下賞」を受賞しました。

■カラーバリアフリーに配慮

2008年度からの新しい取り組みとして、多様な色覚を持つ人々にもきちんと情報が伝わるような色遣いやデザインに考慮したカラーバリアフリー商品を発売しています。現在はコスメジックシリーズやサンカット製品、メンズソフティモシリーズの一部の製品など13品ですが、今後も順次アイテムを増やしていく予定です。



今まで難しいとされたチューブ製品にも点字の表示を



読みやすさに工夫した日焼け止め

社会とともに

コーセーグループはお客さまや事業を通じて地域社会や国際社会と関わるだけでなく、社会との共生をはかって新しい時代を拓いていきたいと考えています。

盲導犬の育成・普及活動を支援

株式会社コーセーコスメポートは、売上の一部を全国盲導犬施設連合会に寄付しています。寄付金は盲導犬の育成や普及活動に役立てられたり、身体障害者補助犬健康管理手帳の制作などに活用されています。



ノーマライゼーション支援

コーセーは、障害者のノーマライゼーションと雇用促進にも積極的に取り組んでいます。特例子会社・株式会社アドバンスもその一つで、障害者と健常者が一緒になって化粧品の製造に従事しています。また、コーセー化粧品販売株式会社の秋田受注センターでは、2008年障害者雇用職場改善好事例コンテストで奨励賞を受賞しました。その他、養護学校の卒業予定者に対するメイクアップ指導を中心とした「おしゃれ講座」も毎年開催しています。



養護学校でのメイクアップ指導

エコキャップ活動に参加

エコキャップ推進協会が進めているペットボトルのキャップを回収する運動にも参加しています。この運動は開発途上国にワクチンを贈るといふもので、コーセーでは本社オフィス、研究所、生産部門、研修センターなどが中心になって実施していますが、コーセーコスメポート、中四国流通センターや中部ストア支店など事業所独自でも行っています。

スポーツや文化活動を支援

コーセーは社会貢献の一環として、スポーツ活動や芸術・文化活動の支援も積極的に実施しています。財団法人日本スケート連盟のスポンサーとしてフィギュアスケートやスピードスケートの様々な大会の支援を行っています。2008年11月に開催されたNHK杯国際フィギュアスケート競技大会では、女子選手のメイクアップを担当しました。また、財団法人日本水泳連盟に対しても、シンクロナイズドスイミングをコスメティックパートナーとして支援しています。芸術・文化面に対しても様々な支援活動を行っていますが、トークイベント「コーセー・アンニュアージュ・トーク」は1990年以来実施しています。



コーセー・アンニュアージュ・トーク

学術振興への支援

コーセーの学術支援活動はコスメトロジー研究振興財団等への支援や、大学との産学連携共同研究室の設立など多岐にわたっています。財団法人コスメトロジー研究振興財団はコーセーの創業者である小林孝三郎が、化粧品学（コスメトロジー）の発展のために1990年に設立しましたが、コーセーは財団の活動を支援しています。産学連携共同研究室は、東京大学薬学部とのコラボレーションで肌の老化に関係の深い「活性酸素」をテーマとした研究を続けていますが、その他、一般市民が参加できる早稲田大学オープンカレッジへの講師派遣、東京ヘアメイク専門学校への講師派遣、様々な大学への講師派遣などを通じて学術面への支援を積極的に行っています。



コスメトロジー財団の表彰・贈呈式

お取引先・株主の皆さま・社員とともに

コーセーグループは企業を取り巻く全てとよりよい共生をはかるために、お取引先をはじめ株主の皆さま、そして企業活動を支える社員一人一人とのパートナーシップが重要であると考えています。

ご販売店との共存共栄

コーセーは創業の頃よりご販売店との関係を重視してきました。化粧品専門店の一軒一軒と直接契約を結び、共存共栄を目指す経営の実践とともに、一緒になってお客さまへの親切な対応とカウンセリングの徹底を追求してきました。現在では、多様化したお客さまのニーズにお応えするために、様々な販売チャネルに合わせた化粧品を開発し、提供していますが、チャネルごとの状況に合わせてご販売店ときめ細かい信頼関係を築いています。

お取引先とのパートナーシップ

コーセーは、化粧品の原料や容器の材料をはじめ流通、施設の建設など様々な分野で多くの企業とお取引していますが、何よりも信頼関係が結ばれた強いパートナーシップが大事であると考えています。新しい原料の開発や、お客さまの利便や環境に配慮した化粧品容器の考案など、お取引先と協同して開発研究を実施することも積極的に行っています。

株主の皆さまとともに

コーセーは株主の皆さまの期待にお応えするために、経営の健全性や効率性を高めて安定した利益還元をはかる努力を続けています。優れた研究開発力、特長あるブランド群、強固な営業体制などコーセーグループの強みを最大限に生かしていくことはもちろん、経営改革や業務改革にも積極的に取り組んでいます。また、女性のためのIRセミナーを開催するなど、適正な情報開示によって株主や投資家皆さまの理解と信頼を得ることができるようIR活動に力を注いでいます。



女性のためのIRセミナー



株主優待品の一例

能力が発揮できる職場環境を

コーセーグループでは、「経営理念」のトップ項目に「ひとりひとりを大切に」を掲げ、人材育成とともに、社員一人ひとりが能力を十分に発揮することのできる健全な職場環境の整備に努めています。自らやりたいという情熱に応えるために、新しい仕事へのチャレンジチャンスとして人材公募制度を設けているのもその一つ。各部門からの募集に対して、現在の業務の事情を超えて応募できる制度で、募集側の要件を満たせば応募に規制はなく、誰でもチャレンジできます。

社員のアイデアを商品に

全社的な改革の一環として、2008年度から社員なら誰でも自分の考える商品のアイデアを提案できるKOSE アイデアコンテストを開催。日頃から、こんな商品があったらいいなと考えているアイデアを募集したところ2,348通もの応募がありました。優秀なアイデアには社長賞が贈られましたが、このコンテストから実際に市場に提供される化粧品が生まれる日もそう遠いことではありません。

コーセーについて

コーセーグループは、基本理念に「英知と感性を融合し、独自の美しい価値と文化を創造する」を掲げ、化粧品を主体とする企業活動を展開しています。

新しい化粧品を生み出す 商品開発力が特長です

コーセーの特長は、創業以来64年にわたって、ほぼ化粧品のみを事業領域とした企業活動を続けてきたことにあります。企業規模が拡大し、グループ企業が増えた現在でもそのことは変わりありません。コーセーグループの企業理念体系の中に「ひとびとの期待に応え、期待を超える」という言葉が掲げられていますが、これは1946年の創業より一貫して企業方針の第一としてきた「お客さまに最高の品質をお届けしたい」ということを表すものです。そして、この理念を堅持し続けてこられたのは、化粧品だけを見つめ、その理想を追い求めてきたからであると考えています。

その現れのひとつが、業界内外から認められている研究開発力の高さです。現在多くの女性たちに広く愛用されているエッセンスと呼ばれる美容液は、1975年にコーセーが世界で初めて開発し、R・Cリキッドとして市場に送り出したものです。その後、1979年に発売したモイストゥアエッセンスとともに高い支持を得て、美容液というカテゴリーを創りだし

ました。またファンデーションの分野でも数々のタイプを開発し、定番アイテムとして育て上げてきました。パウダーファンデーション、2ウェイファンデーション、夏用のリキッドファンデーション、下地のいらぬクイックタイプのファンデーションなど全てコーセーが業界に先駆けて開発してきました。この他、美容効果を長時間維持することができるリポソームを応用した美容液、肌にのばすときに液体状に変化する粉の美容液など、コーセーが開発してきた化粧品は数多くあります。

このような新しい化粧品を生み出す力にあわせて、お客さまの手元に届

く全ての化粧品の品質を高めることへのこだわりも、コーセーの特長です。生産設備や体制の強化にいち早く取り組み、1970年代からQCといわれる品質管理活動を導入しています。1980年には化粧品業界で最初にデミング賞を受賞しましたし、品質保証に関する国際規格ISO9001の認証も全ての生産施設で取得しています。また、このようにして作った化粧品をお客さまに心を込めて手渡しするとともに、真にご満足いただくために、販売するチャネルの状況やお客さまのニーズにあわせて提供する化粧品を変えていくというコーセー独自のブランドマーケティングも展開しています。

会社概要

名 称	株式会社コーセー
本 社	〒103-8251 東京都中央区日本橋3-6-2
創 業	1946年3月2日
設 立	1948年6月8日
資 本 金	4,848百万円（'09年3月末）
代表取締役社長	小林 一俊
連結従業員数	5,370名（2009年3月期末 嘱託・パート社員を除く）

株式会社コーセー 事業所

工 場

[狭山工場]
埼玉県狭山市富士見2-20-1
[群馬工場]
群馬県伊勢崎市境伊与久1913

研究所

東京都北区栄町48-18
[コーセー研究所 技術情報センター]
東京都北区栄町46-3
[コーセー基礎研究所]
東京都板橋区小豆沢1-18-4

流通センター

[北海道流通センター]
北海道恵庭市戸磯347-13
[東北流通センター]
福島県須賀川市越久発米19-1
[狭山流通センター]
埼玉県狭山市富士見2-20-1
[名神流通センター]
滋賀県湖南市中央3-8-1
[中四国流通センター]
岡山県笠岡市みの越1番地
[九州流通センター]
福岡県古賀市糸ヶ浦30

研修センター

[王子研修センター]
東京都北区王子2-29-2

主な関係会社

コーセー化粧品販売（株）
コーセーコスメニエンス（株）
コーセーコスメポート（株）
（株）クリエ
（株）ドクターフィル コスメティクス
コーセーコスメピア（株）
（株）コスメラボ
（株）アドバンス
コーセー保険サービス（株）
インターコスメ（株）
（株）アルピオン
（株）テクノラボ
（株）コスメディック
高絲化粧品有限公司（中国）
高絲化粧品銷售（中国）有限公司
高絲香港有限公司
KOSÉ SINGAPORE PTE. LTD.
KOSÉ AMERICA INC.
KOSÉ KOREA CO., LTD.
台湾高絲股份有限公司
KOSÉ (THAILAND) CO., LTD
KOSÉ (MALAYSIA) SDN. BHD.

事業分野と主力ブランド

●化粧品事業

コーセーグループの事業領域は化粧品を中心としていますが、中でも高付加価値ブランドを中心とする分野を化粧品事業と位置付けています。全体に占めるウェイトは74.4%（'08年3月期売上）と3/4を上回っています。百貨店や化粧品専門店、大型量販店、ドラッグストアなどを主力に、様々な販売チャネルを通じてお届けしています。代表的なブランドとしては、コスメデコルテやアウエイク、ポーテドコーセーなど付加価値の高いハイプレステージブランド群と、エスプリークプレシヤスやプレディア、ヴィセ、雪肌精などカウンセリングによる販売ながらも、より多くの方に使っていただきたいプレステージブランド群があります。また、ライスパワーエキスNo.11を配合したモイストゥアスキンリペア、海外のファッションデザイナーとコラボレーションしたジルスチュアート、ドクターコスメのフィルナチュラント、サロン向け化粧品のクリエなども化粧品事業に含まれるブランドです。

●コスメタリー事業

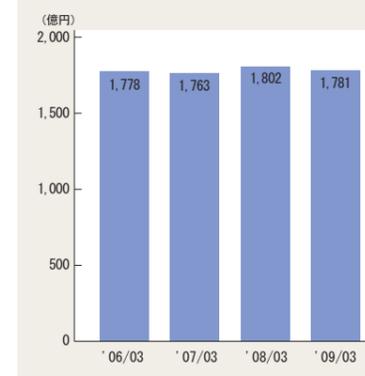
コーセーグループではセルフ販売を中心とする分野も、より価値観の高い化粧品発想の商品開発を行なっているため、この分野をコスメタリー事業と呼んでいます。全体の24.6%（'09年3月期売上）を占め、量販店やドラッグストアを中心に幅広い販売チャネルで展開しています。高級ヘアケアブラン

ドのスティープン・ノル コレクションをはじめ、コーセーコスメポートのサロンスタイルやソフティモ、マリ・クレール、コーセーコスメニエンスのハッピーバスデイ、ネイチャーアードコー、ファシオ、そしてロンドン発のリンメルなどが含まれます。

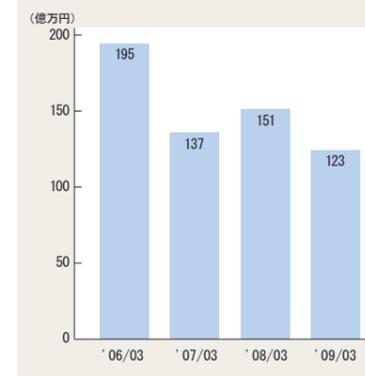
●その他の事業

この事業は相手先ブランドの化粧品を受注生産したり、全国のホテル等で使われるアメニティ化粧品や業務用化粧品の販売が中心の事業ですが、全体に占めるウェイトは1.0%とそれほど高くありません。

売上高推移（連結）



営業利益推移（連結）



環境会計

コーセーグループは企業の社会的責任を果たす活動の一環として、1997年より環境基本方針と環境行動指針を定めて具体的な活動を実施しています。このような活動の目安として、今年度も『環境会計ガイドライン2005』を踏まえて、コーセーグループの環境会計を実施しました。

産業廃棄物のうちわけ

2008年度は産業廃棄物処理の事前作業として分別の細分化を強化したため、資産循環コストがアップしましたが、トータルの廃棄コストを大幅に削減することができました。また、環境改善対策の一環として屋根塗装に遮熱効果を使用し、冷暖房費を抑制するなど効果の持続する投資に力を入れました。なお、特に断りのない限り、過去数値の遡及的な修正は行っていません。

(単位：万円)

分類	主な取り組みの内容	2008		2007		2006	
		投資額	費用額	投資額	費用額	投資額	費用額
1. 事業エリア							
①公害防止コスト	大気汚染、水質汚濁、土壌汚染、騒音、悪臭防止	10,752	16,871	19,316	18,052	2,462	16,648
②地球環境保全コスト	温暖化防止、オゾン層破壊防止	0	2,984	652	3,384	627	3,352
③資産循環コスト	節水、資源の効率利用、産業廃棄物処理費等	212	16,851	1,227	14,237	3,268	15,913
2. 上・下流コスト	グリーン購入、容器包装等のリサイクル負担金等	0	14,016	0	26,641	0	22,533
3. 管理活動コスト	環境教育・委員会、ISO関連、環境負荷測定	0	3,528	0	2,958	0	3,809
4. 研究開発コスト	環境配慮製品の開発	0	7,020	0	9,267	0	5,319
5. 社会活動コスト	環境改善対策、環境情報の公表	4,190	6,131	2,018	5,668	0	5,165
6. 環境損傷コスト		0	479	0	479	0	0
合計		15,154	67,880	23,213	80,686	6,357	72,739

※投資額は、集計期間に取得した償却資産を計上しております。※減価償却費は、財務会計上の耐用年数及び償却方法で計上しております。※複合コストは、環境保全に関わる部分について差額及び按分集計しております。

環境保全効果

生産設備の増強を行ったため消費電力が増大、柏崎刈羽原発の操業停止によるCO₂排出係数の上昇という理由もあってCO₂排出量が増大しました。箱能書の採用拡大により2008年度は19トン（樹木570本分）、約7,900万円の費用削減ができました。現在、コーセーでは灯油から天然ガスへとエネルギーの転換を推進中です。

環境保全効果		前年度実績 (基準期)	今年度実績 (比較期)	2008 保全効果	2007 保全効果	2006 保全効果
事業活動に投入する 資源に関する環境保全効果	エネルギー消費量の減少（電力）	14,472,379kw	14,758,000kw	-285,621kw	10,071kw	569,918kw
	エネルギー消費量の減少（重油）	337,835L	332,500L	5,335L	8,256L	48,912L
	エネルギー消費量の減少（灯油）	920,790L	474,600L	446,190L	-44,090L	103,950L
	エネルギー消費量の減少（天然ガス）	0Nm ³	376,399Nm ³	-376,399Nm ³		
事業活動から排出する環境負荷及び 廃棄物に関する環境保全効果	環境負荷物質排出量の減少（CO ₂ ）	8,532.9t	9,138.8t	-605.9t	-83.6t	618.2t
	廃棄物等排出の減少	3,343.7t	3,016.0t	327.7t	-22.2t	592.8t
環境保全対策に伴う経済効果（実質的効果）						
費用の削減	省エネルギー、省資源による費用節減	-	-	9,222万円	4,133万円	6,077万円
	資源再利用による廃棄処理費の節減	-	-	3,125万円	5,174万円	7,481万円

環境保全コストの参考データ

(単位：万円)

環境保全コスト（環境保全対策分野に応じた分類）		主な取り組みの内容	投資額	費用額
分類	①地球温暖化対策に関するコスト	温水冷却水の循環式採用	0	2,458
	②オゾン層保護対策に関するコスト		0	136
	③大気環境保全に関するコスト	ボイラーガス化	4,439	5,749
	④騒音・振動対策に関するコスト	省電力エアコンプレッサー	1,596	434
	⑤水環境・土壌環境・地盤環境保全に関するコスト	排水処理場	4,717	10,634
	⑥廃棄物・リサイクル対策に関するコスト	リサイクル負担金	212	30,594
	⑦化学物質対策に関するコスト	生分解原料の採用	0	7,020
	⑧自然環境保全に関するコスト	環境に配慮した建物設備補修	4,190	6,610
	⑨その他コスト	管理運営コスト他	0	4,245
合計			15,154	67,880

環境保全効果の参考データ

生産資源消費量は市場状況による生産量や気候や社会状況など様々な要因により変動します。そのため、総消費量と原単位消費量の双方から環境保全効果を分析しています。

生産拠点における生産量推移

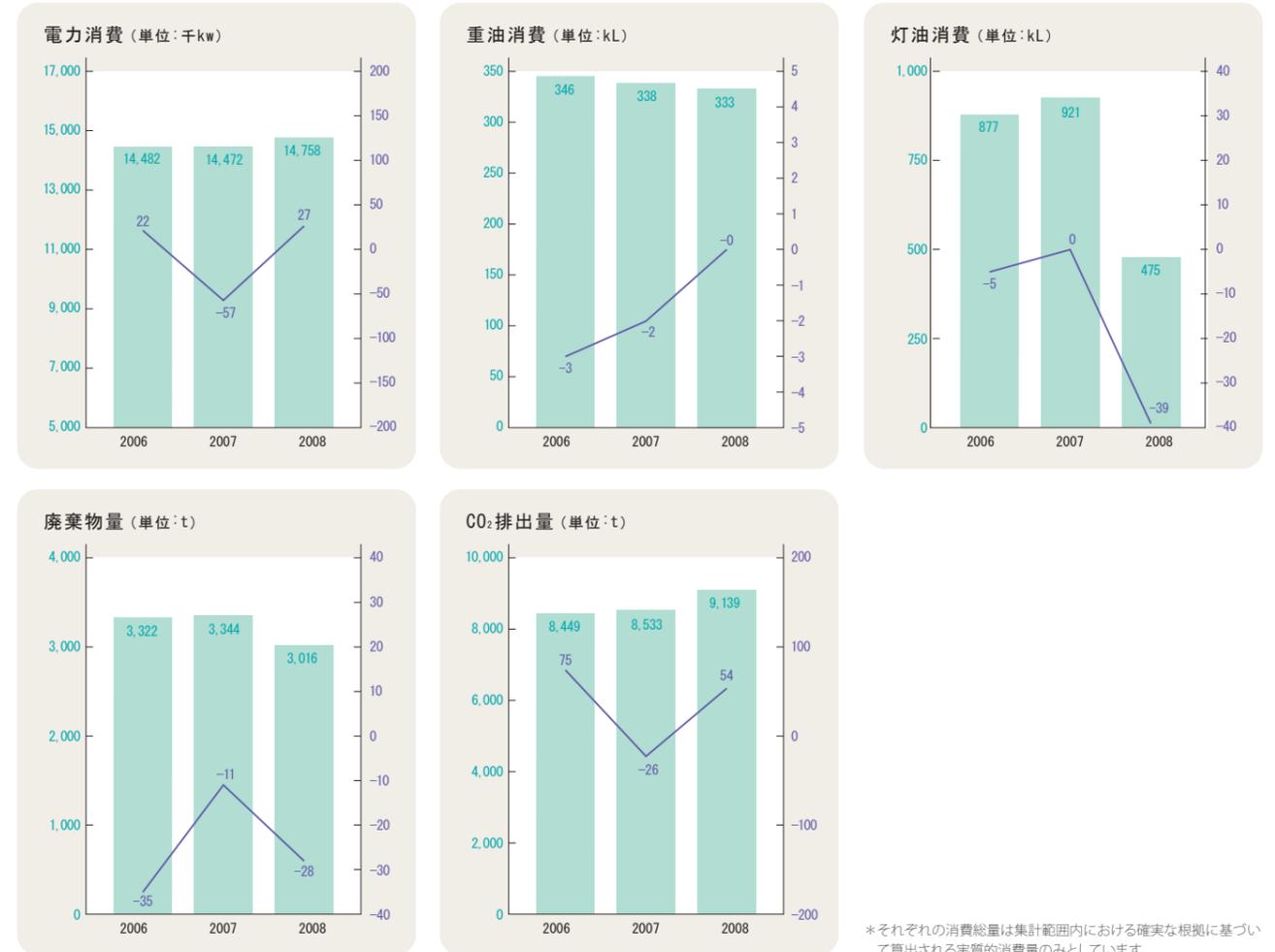
(単位：千ダース)

	2008	前年比	2007	2006
コーセー狭山事業所	1,636	95.4	1,714	1,951
コーセー群馬事業所	8,248	101.4	8,136	7,712
アルビオン熊谷事業所	1,571	96.8	1,623	1,318
合計	11,455	99.8	11,473	10,981

*外注加工による生産量は含めていません。

実総消費量・原単位換算環境保全効果の推移

(注)各表の棒グラフは総消費量(左目盛)、折れ線グラフは原単位あたりの環境保全効果(右目盛)を表します。



*それぞれの消費総量は集計範囲内における確実な根拠に基づいて算出される実質的消費量のみとしています。

〈2008年度の集計について〉

環境会計については、グループ経営の観点から株式会社コーセーのほか生産を行っている国内の関係会社も集計範囲に含めています。

集計期間	2007年度(2008/4~2009/3)
集計範囲	株式会社コーセー、主要関係会社4社(インターコスメ株式会社、株式会社コスメラボ、株式会社アドバンス、株式会社アルビオン)
集計基準	『環境会計ガイドライン2005年度版』及び『環境報告書ガイドライン2007年度版』に準拠